

報告

第 6 回ジョイント連続セミナーの報告(令和 4 年度)

早瀬良^{1,2)} 小松万喜子^{1,2)}

¹⁾中部大学生命健康科学部保健看護学科 ²⁾生命健康科学研究所保健看護領域部門

I. はじめに

中部大学生命健康科学研究所保健看護領域部門では、大学院生、教員、学部学生、地域の看護職、医療職などの研究力向上をめざして、毎年、ジョイント連続セミナーを企画・開催している。6 回目となる今回のセミナーでは、「信じるころ、信念の形成と変化のしくみ～社会心理学の立場から～」と題し、医療従事者として、教員として、これから医療従事者になる学生として知っておくべき「信じるころのしくみ」について学ぶ機会とした。

私たちは様々なことについて「信じる」「信じない」という判断をし、あまり意識することなく、それらの判断に基づいて生きている。信じるがゆえに安心や心の癒しを得ることもあれば、詐欺、新興宗教、カルト集団などに誘われたり、相容れない他者の強固な信念と向き合い苦慮したりすることもある。カルト宗教については、オウム真理教や旧統一教会(現:世界平和統一家庭連合)の当事者だけではなく家族の問題を明らかにした研究もある¹⁾⁻⁵⁾。安倍元総理が銃撃された衝撃的な事件後、その家族や子どもが置かれる状態も社会問題として注目されている。

今回のセミナーでは、こうした「信じるころ」のしくみを深く知る機会としたいと考え、①ウェルビーイングを考えるにあたり、信じるとはどういうことなのか? ②信念はどのように形成され、変容するのはどういうときなのか? という視点で、この分野に造詣の深い西田公昭氏に講演していただくことをお願いした。

II. セミナーの概要

1. 日程:2023 年 1 月 21 日(土)14 時~16 時
2. 開催方法:Zoom ウェビナーによるオンライン開催
3. テーマ:信じるころ、信念の形成と変化のしくみ～社会心理学の立場から～
4. 講師:立正大学心理学部対人・社会心理学科教授 西田公昭氏

5. 参加者:158 名。内訳は、一般参加者 28 名(本学臨地実習施設関係者、近隣の医療福祉施設職員、学外教員)、学内教員 37 名、学生 93 名(院生含む)。



講師 西田公昭氏

6. 講演内容(要約)

1) 知識や信念形成の心理

迷信など明らかに怪しいものでも信じてしまい、健康被害事故や事件が繰り返されている。セミナーの中ではその一部として、ミイラ化死体が発見された複数の事件や手かざしによる治療や除霊の事件を例に挙げて説明がなされた。被害者の心理として、なぜ信じてしまうのかについて、怪しくても信じる条件には、①ユーティリティ(解決感-「(神仏などにすがり不幸なことが解決することが)本当だったらうれしいなあ」という感覚。都合がいいという心理)と、②リアリティ(現実感-「いかにも本当にありそうだ」という感覚。自分も確かに経験したし、周囲の皆も認めているからという心理)の 2 つが作用する。

科学的に証明できないものを信じさせるトリックとして、恋愛占いを例に“コールドリーディング”の説明がされた。西田氏自身が 2018 年に行った研究では、大学生約 100 名のデータから占い師のコメントが 5 因子構造からなることが見いだされ、5 割以上の女子学生に当てはまる内容が多かった。5 因子の内容は、①恋愛苦手意識の指摘:恋愛の駆け引きがうまくないことを告知。②一般的に望まれる恋愛・結婚観の指摘:家庭を大事にしたいなどの願望を告知。③恋愛へのこだわり感の指摘:結婚イメージにこだわりはあまりないことを告知。④意外性やユニーク性に対する受容的指摘:性格や行動傾向の受容感を供

与。⑤対象者の意思の尊重:これまでの態度や行動を受容。であった。

もう 1 つのトリックとして、事前に個人情報を得ておいて、まるで知らなかったかのように振舞って言い当てる“ホットリーディング”の危険性とそのメカニズムが説明された。個人情報はハッキングやフィッシングだけでなく、関係者による漏洩もある。友人や店員、見舞客に扮して病院に紛れ込み接近してくるケースもある。「言うとおりにしないと災いが起きる」と霊能師や占い師に言われた場合、半信半疑でも錯誤相関(相関がないデータに相関があると思ひ込んでしまう現象)により信じていってしまう恐ろしさを強調された。

2) マインド・コントロール状態と行為

マインド・コントロールとは自己決定権を放棄して支配者の指示に絶対服従することを是とする状態である。外見上に特徴はないが、以前のその人物像とはまるっきり変わってしまった言動や印象になる。被害者は自由に考えているように錯覚し、支配を受けていることに自覚がないことが多い。どのような論理的な批判にも耳を傾けないし、批判的な意見には、蔑むように否定してくる。「洗脳」は、ヒトの意思を誘導するという目的はマインド・コントロールと同じであるが、身体的に拘束して拷問にかけるなどの強制をとめないながら、行動や思想を押しつける。

マインド・コントロールは、物理的な拘束や拷問を用いず、ヒトが獲得する情報を操作するところから、認知や感情に影響を与えて価値観を転換させ、思想や行動を誘導するコミュニケーションの技法である。洗脳の操作は、強引なので、抵抗にあいやすいが、マインド・コントロールだと、当人は操作されていることに気づかない場合が多く、自発的な意思だと思ってしまうやすいため、マインド・コントロールは洗脳の進化系ともいえる。マインド・コントロールによって見せられる理想の自分は一見もつともらしいがそれは幻想である。

いずれのカルト勧誘も、正体を隠し、甘い話ばかりで、怪しくないと感じさせるのがうまい。なお勧誘者も組織の裏を知らず、信じ込んで善意で勧誘してくるという注意喚起もなされた。

3) 破壊的カルトと集団健康度

破壊的カルトとは人権侵害をする団体のことである。

Zimbardo, P. G. (元アメリカ心理学会会長, 元スタンフォード大学教授)の「カルトに入るのではない。気づくとそこはカルトだったのだ。」という有名な言葉にあるように、勧誘してくる人は善良な人で、善意のつもりで近づいてくるので破壊的カルトだと気づけない。

問題のない団体と破壊的カルトの違いを明確にした研究がない中、西田氏自身が行った研究の 1 つとして、カルトでのワースト経験と一般的集団経験の比較や集団健康度の比較の紹介がなされた。その結果、カルト経験者は企業人や大学生より、「メンバーとしての過度な献身」「リーダーへの盲目的服従の強制」などの得点が高く、集団健康度(GHS)が悪いことが示された。

最後に、統一教会やオウム真理教に関する事件の数々を振り返るとともに、当事者が、マインド・コントロールを受け、事件を起こしたメカニズムが説明された。勧誘を受ける前(不確実な世界にいる自分)は、家族や社会的支援があるものの未解決な現状があり、それに対して原因はわからないが、もしかしたら自分が間違えているのかと思うようになる。そして「自分が幸せに、家族が幸せに、そして世界の日々がみんな幸せになればいいのに、なぜだか世の中うまくいかないんだ」と理想と現実のギャップに葛藤する。そして、教団の世界観を知る(サタンや闇の組織の存在)。友人も家族も無知か、闇の支配を既に受けていて、原因は自分でも運でもなく、サタンに世界は支配されている、このままでは苦しみは続くし、もっと不幸になると思うようになる。こうして勧誘を受容(カリスマ崇拜によって自己放棄)していく。あわれな人たちの言うことには絶対感わされず、我々のトップに全てを捧げれば今にきつといい結果が見えてくるという思考になっていってしまう。このような破壊的カルトの被害を予防するためには、まず人はどうして信じてしまうのかの知識を持つことの重要性が強調された。

III. 参加者の反応

セミナー終了後、任意で無記名のアンケート調査を実施し、124 名(回収率は 78.5%)から回答が得られた。

1. 参加動機

参加動機は 124 名中 65 名(52.4%)が「テーマへの興味」、41 名(32.8%)が「今後への活用」であった(図 1)。

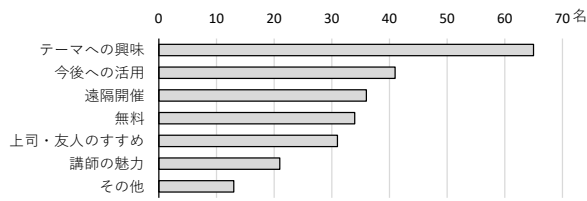


図1 参加動機

2. 講演内容の理解度

講演内容の理解度はほぼ全員 (97.6%) が「理解できた」「やや理解できた」と回答した (図 2)。

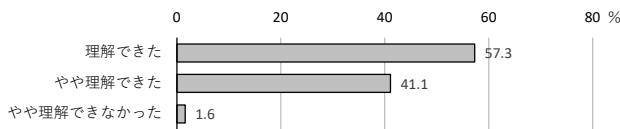


図2 講演内容の理解度

3. 満足度と感想

セミナーの満足度と今後に役立つかの設問では、ほぼ全員 (98.4%) が「満足」「やや満足」、全員が「役立つ」「やや役立つ」と、セミナーへの高評価を得ることができた (図 3, 4)。

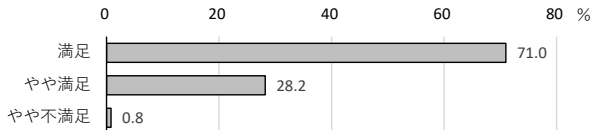


図3 セミナーの満足度

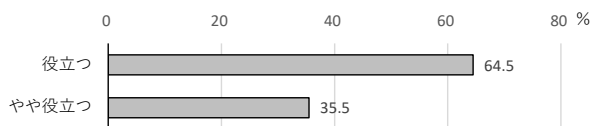


図4 セミナーは今後に役立つか

4. セミナーへの意見・感想

セミナーへの意見・感想の自由記述の回答は 33 名からあった。以下に抜粋する。

〈一般参加者〉

- ・ マインド・コントロールされる過程をわかりやすくお話しくださり、批判的思考を常にもつことが必要だと感じました。
- ・ 患者の意志決定の際に大きく影響するテーマで興味深かった。
- ・ テーマ、講師選択がタイムリーであり期待を持って拝聴させていただきました。

〈教員〉

- ・ DV・児童虐待などと共通点が多いとのことで、自分の専門分野においても大いに役立つと感じました。
- ・ 被害者に手を差し伸べる必要性を感じました。DVなどの被害者支援に携わる方の講演も聞いてみたいです。
- ・ マインド・コントロールはわかっているようで明確には知らなかったので大変勉強になりました。GHSのことを初めて知りました。カルト集団は通常の集団健康度とはかなり差があるということで、これを知っていることがマインド・コントロールされにくくなる一手だと思いました。

〈学部生〉

- ・ マインド・コントロールの危険性とそれに対する対処法について学ぶことができ、今日の生活でも注意して生活していきたいです。
- ・ マインド・コントロールが身近にあるということを知ることができて完全に防ぐことは難しいかもしれませんが、よかったです。
- ・ オウム真理教など聞いたことのあるもので、今までカルト宗教などに自分ははまることはないと思っていましたが、自分は大丈夫だと思わないことが自己防衛につながると学びました。また、批判的な思考をすることが重要であると学び、言われたことや出された情報に対してそれが正しいことであるのか見極めるために必要な思考であると思いました。
- ・ 洗脳やマインド・コントロールなどについて学び、これらによって自分自身が危機に追い込まれないようにするためにも信頼できる相談相手と正しい知識は何かを常に求めることが大切だとセミナーを受けて学んだ。
- ・ 騙されることは現実と理想の差やその嘘と真実の情報の違いが分からないことで生まれてくると感じたため、個人で防げる範囲に限界はあると思いました。そのためにも、確実な情報や法や制度があって広まることが重要なのだと思いました。
- ・ 今の自分にはそんなこと起きないだろうと軽く考えていましたが、他人事ではないのかも知れないという危機感を感じました。今日学んだ事を今後活かし、自分の身をきちんと自分で守っていきたいと思います。

IV. おわりに

看護師や医療従事者だけではなく、働くうえで、人の価値観や信念はその人の働き方や行動に大きく影響する。そのため、本セミナーでは、人の信念はどのように形成され、変容するのかということを学びたいと、西田公昭氏に講師依頼をし、ご快諾いただいた。西田氏の講演を拝聴し、私たち自分自身や親しい人を破壊的カルトから身を守る方法や、周囲の他者と信念が異なる時にどうすればよいのかを考える機会となった。西田氏のこれまでの研究で裏付けされた成果を踏まえて、具体的で多岐にわたるご講演をいただいたことに心から感謝する。

そして、中部大学の教員として、本学の学生を破壊的カルトから守り、卒業してからも自分自身のウェルビーイングを保ちながら働き続けられるように、本セミナーで得た知見を今後の教育や研究活動につなげていかねばならないと強く感じた。

最後に、本セミナーにご参加いただきました皆様、企画・運営に際しご尽力いただきました関係の皆様へ厚く御礼申し上げます。

引用文献

- 1) 中西彩之・西田公昭(2019) “カルト”問題に直面した家族の心理的プロセスの研究—曖昧な喪失に対する家族の反応—, 応用心理学研究, 45(1), 1-14.
- 2) 西田公昭(1995) ビリーフの形成と変化の機制についての研究(4)—カルト・マインド・コントロールにみるビリーフ・システムの強化・維持の分析—, 社会心理学研究, 11(1), 18-29.
- 3) 西田公昭(2001) オウム真理教の犯罪行動についての社会心理学的分析, 社会心理学研究, 16(3), 170-183.
- 4) 西田公昭・黒田文月(2004) “破壊的カルト”での生活が脱会後のメンバーの心理的問題に及ぼす影響, 心理学研究, 75(1), 9-15.
- 5) 高杉葉子(2016) カルト脱会後における勧誘前と脱会後の認知変化に関する質的検討—家族関係と自己の心理的課題およびコミュニティについて—, コミュニティ心理学研究, 20(1), 62-80.

【講師紹介】

西田公昭氏

現職: 立正大学心理学部対人・社会心理学科 教授

略歴: 関西大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学。1992年静岡県立大学国際関係学部および同大学院助手。1994年米国スタンフォード大学心理学部の客員研究員。1997年から静岡県立大学看護学部で講師・准教授として長年看護教育に携わり、2011年から現職。
社会活動: 日本脱カルト協会代表理事、靈感商法等への悪質商法検討会委員、静岡県エイズ対策専門家会議委員等を歴任。詐欺や悪質商法ならびにカルトのマインド・コントロールの問題において、鑑定書や意見書の提出ならびに証言のために法廷に召喚されること多数。警察庁、警視庁、内閣府、消費者庁、国民生活センターほか、全国各地の行政機関主催の講演、シンポジウムに登壇すること多数。また行政機関の有識者ヒアリング、広報物に監修や制作協力し、マスメディアに情報提供、出演、監修者として多数協力している。

著書: マインド・コントロールとは何か(紀伊国屋書店, 1995)、「信じるころ」の科学: マインド・コントロールとビリーフ・システムの社会心理学(サイエンス社, 1998)等多数。

企画・運営

2022年度生命健康科学研究所の助成を受け実施した。

[企画委員] 城憲秀, 堀井直子, 大村知子, 白石知子, 梅本充子, 江尻晴美, 渋谷菜穂子, 横手直美, 山田礼子, 早瀬良, 小松万喜子

[運営委員] 堀文子, 夏目美貴子, 伊神美早, 伊藤佳央理, 横林康子

Title: Report of the 6th Joint Seminar of the Division of Nursing 2022.

Author(s): Ryo Hayase^{1,2)}, Makiko Komatsu^{1,2)}

Address(es): ¹⁾ Department of Nursing, College of Life and Health Sciences, and ²⁾ Institute of Life and Health Sciences, Chubu University, 1200 Matsumoto-cho, Kasugai, Aichi 487-8501, Japan

Keywords: Joint seminar, Well-being, Mind control